

招致の意義

1972年に札幌で開催されたアジア初となる冬季オリンピックは、札幌のウインタースポーツシティとしてのプレゼンスを高め、国際化に大きく貢献するとともに、札幌の街を大きく変え、市民の誇りとアイデンティティの形成につながりました。

あれから40年余り。

再び冬季オリンピックを開催し、初のパラリンピックを開催することは、子どもたちに夢と希望を与え、冬季スポーツを振興し、世界平和に貢献するというオリンピック本来の意義に加え、都市基盤および冬季スポーツ施設の更新や、バリアフリー化の促進といった都市のリニューアルを推し進めるほか、札幌・北海道のみならず、日本全体の活性化につながるといった効果が期待されます。

さらに、札幌が今後待ち受ける人口減少や少子高齢化の更なる進行への対応や、新たなエネルギー社会の構築といった幾多の困難を克服していく誇り高き市民力を育成し、札幌ひいては北海道の未来を切り拓いていくこととなります。冬季オリンピック・パラリンピックは、時代の転換期を乗り越え、札幌の未来を創り上げていくために、多くの市民が夢を共有し、大きな目標に向かって市民力を結集させるための、この上ない機会であると信じています。

招致から開催までの取組は、市民・企業・行政が一体となる、いわば「まちづくり運動」そのものであります。これを成し遂げることで、成熟都市としての都市ブランドとシビックプライドを醸成し、札幌の街を新たなステージへと押し上げることとなります。

スポーツの栄光、平和の祭典でありますオリンピック、そして世界最高峰の障がい者スポーツ大会であるパラリンピックを札幌で開催したいと思えます。



基本理念

基本理念を考えるにあたって、札幌の強みを活かし、課題を克服しながら、開催概要計画の目指すべき方向性を導き出します。

1. 札幌の強み

(1) レガシー

札幌は1972年のオリンピック冬季大会を契機として地下鉄や道路網などの都市の骨格をつくるとともに、競技施設や選手・役員・報道関係者などの関係者を受け入れるための施設が整備されました。

また、オリンピックを間近に観戦することで市民の中にウィンタースポーツに親しむ文化が定着するとともに、アジアで初めてのオリンピック冬季大会を市民が一丸となって成功させたことは、国際都市札幌として市民の誇りになっています。

(2) ウィンタースポーツ都市としてのポテンシャル

札幌は年間6mを超える降雪がありながら約200万人の人口を持つ都市と自然が共存する街であり、さっぽろ雪まつりなど雪を楽しむ文化が根付いているとともに、交通網などの社会インフラも充実し、国内外からのアクセス環境も整っています。

また、1972年のオリンピック冬季大会開催後も、アジア初のノルディックスキー世界選手権大会やアジア冬季競技大会の開催など、数多くのウィンタースポーツの世界大会の開催実績があるとともに、北海道の持つ食や自然環境など多くの観光客を引き付ける魅力もあるなど、これらを活かした、IOCが求める持続可能なオリンピック・パラリンピック大会の開催が可能な都市です。



2. 課題

(1) 札幌を取り巻く課題

大会後44年を経て、1972年のオリンピックを知る世代は市民の半数以下となり、冬季スポーツの実施率も低迷している状況の中、当時整備された競技施設や社会基盤整備のインフラも老朽化が進み、更新時期を迎えています。

また、北海道では、人口減少による経済活動への影響が懸念される中で、アジア等への市場開拓等の経済政策を進めているところですが、中心都市としての役割を果たす札幌においても集客産業による経済の活性化を図ることで、北海道全体の地方創生が求められています。

さらに、超高齢社会に対応した、すべての人にやさしい新たなまちづくりが求められています。

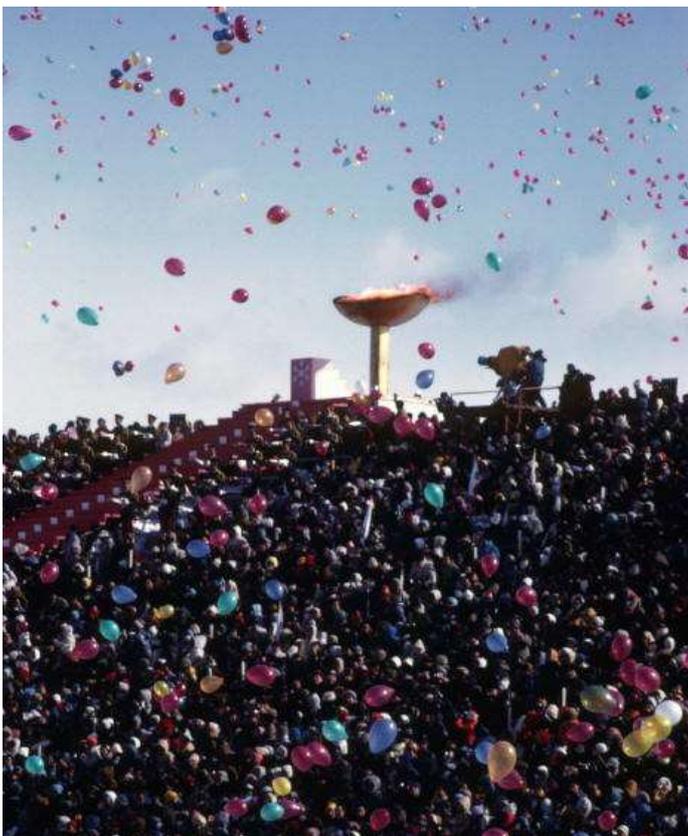
(2) 世界の趨勢

冬季オリンピック・パラリンピックについては、氷上競技施設等の財政負担により、開催可能な都市が限られることや、地球規模で深刻化する環境問題を受け、オリンピック・アジェンダ2020においては施設や自然などの既存資源を活かした財政的にも環境的にもやさしいオリンピック・パラリンピックモデルが求められています。

【オリンピック・アジェンダ2020のポイント】

評価にあたっては、持続可能性とレガシー（遺産）に重点が置かれている。

- ①持続可能性…既存施設の活用、仮設の活用等による財政負担の軽減や、環境への配慮が求められている。
- ②レガシー…競技施設などの有形財産、大会を開催することで得られる、スポーツ振興や地域活性化、市民の誇りといった無形財産としての遺産を未来へ継承していくことが求められている。



基本理念

3. 目指すべき方向性

(1) 大会の開催を契機としたまちづくり

札幌市では、「まちづくり戦略ビジョン」を2013年に策定し、“北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち”と“互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち”を「目指すべき都市像」を掲げ、まちづくりを進めています。オリンピック・パラリンピック大会招致をきっかけとして、まち全体をリニューアルし、雪を楽しむ文化・ライフスタイルを新たな価値として市民にさらには国内及び世界へ発信していくとともに、共生社会の実現を目指し、オリンピックとパラリンピックの融合を図ることで、超高齢社会に対応したユニバーサルなまちづくりを進めるなど、このビジョンを加速していきます。

(2) ウィンタースポーツ都市としての地位の確立

2018年平昌大会や2022年北京大会などの開催を通じて、今後、アジアにおけるウィンタースポーツは飛躍的に発展することが予想されます。札幌において、オリンピック・パラリンピック大会に向けたウィンタースポーツの拠点として環境を充実していくことで、アジア、そして世界に誇るウィンタースポーツ都市としての確固たる地位を築きます。

また、札幌市のみならず北海道全体の発展を常に意識し、道内の魅力資源と札幌の都市機能を融合させながら、北海道の魅力をもっと高め、活力を与えることを目指します。

(3) 持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案

既存の施設や交通インフラなどを最大限活かしながら、ローコストな大会を心掛けるとともに、大会後も市民や国内、そして海外から多くのアスリートやゲストが集まる施設や受け入れ環境の整備を進めます。

また、自然エネルギーを活用した、先駆的な環境モデルの実現を目指します。

これらを踏まえ、以下のとおり基本理念を設定します。

4. 札幌2026大会・基本理念

札幌らしい持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案 ～人と地球と未来にやさしい大会で新たなレガシーを～

- ・1972年で得たレガシー、札幌・北海道の豊かな自然と都市機能を活かします。
- ・雪を楽しむ北国らしいライフスタイルを次世代へ継承します。
- ・パラリンピックを契機に新たな時代に対応した、すべての人にやさしい豊かな暮らしを創出します。
- ・札幌・北海道の魅力とウィンタースポーツの力で世界から人々を惹き付けます。
- ・既存資源を活かし、次世代に過度な財政負担を残すことなく、環境にも配慮した持続可能な大会の実現を目指します。

大会コンセプト

冬季オリンピック・パラリンピックは、それぞれわずか2週間程の行事ですが、オリンピック・パラリンピック後に何を遺すかということや、札幌市の目指すべき都市像としての「まちづくり戦略ビジョン」との整合をとることが重要です。

大会コンセプトの作成にあたっては、基本理念に基づき「どのような大会とするか」「オリンピック・パラリンピックの開催により何を遺すか」「開催を契機にまちがどのようになっていくか」という3つの視点から、8つのコンセプトを設定します。

視点1:大会運営

～スマートで独創的な大会運営モデル～

オリンピックムーブメントが持続するような計画とするため、未来の大会に向けての札幌ならではの独創的な提案が重要であると考えます。

計画をつくるにあたり、競技種目や開催規模などの設定の仕方を含め、コストの削減やテロ対策など、スマートで安全安心な大会としていくことが重要であると考えます。

1. アスリートファーストの視点で

○優れた競技環境、国際大会の開催実績に基づく高い運営能力、万全な警備・危機管理体制、良質な宿泊環境、会場への快適なアクセスなどアスリートにとって最適な環境を提供します。

○選手の移動、地理的条件、持続可能性を考慮した可能な限りコンパクトな施設配置を目指します。

○計画段階で大会運営や施設計画に選手の意見を反映させます。

○次代を担う若者や子どもたちにも普及できる新たな競技種目を取り入れます。

2. 札幌ならではのおもてなしを

○良質で多機能な宿泊施設、快適な交通アクセス、北海道の豊かな食などを活かし、選手や役員、オリンピックファミリー、観客などの来訪者に滞在期間をストレスフリーに過ごせるおもてなしを提供します。また、公共空間の禁煙化を進めます。

○誰もが自然の雪と氷を楽しめる創造的な文化・芸術イベントを創り上げるとともに、地域住民のボランティア等、市民参加の手作り感ある大会運営により、来訪者をおもてなしします。



3. パラリンピックのさらなる発展を

○オリンピックとパラリンピックの融合により、互いに手を携え、誰もが活躍できる共生社会への実現へつなげていきます。

○障がい者スポーツの大会を積極的に開催し、パラリンピック、パラリンピアンへのプレゼンスを向上させるとともに、障がい者スポーツの普及・発展に寄与することで、バリアフリー社会を構築していきます。

○パラリンピックの大会を契機に、競技会場や会場へのアクセスにおけるユニバーサル化を進めます。

○パラリンピックを契機に、パラリンピック教育を推進するなど、ノーマライゼーションの理念を広め、心のバリアフリー化を進めます。

4. 持続可能性に配慮したオリンピック・パラリンピックを

○既存の夏季施設など、既存資源の活用を前提に財政負担を低減するとともに、競技施設への再生可能エネルギーの導入や公共交通を軸とした輸送計画による環境負荷の低減など、持続可能性に配慮した大会を提案します。

○ランニングコスト削減に配慮し、後利用を考えた恒久施設と仮施設を組み合わせるなど、無駄のない施設計画をつくります。

○建替えにより整備する競技施設については、大会後に夏冬問わず多目的に活用できる稼働率の高い施設とする後利用計画をつくります。

○選手村やメディアセンターなどの非競技施設については、更新時期にある既存の同種用途施設の再整備と連動させることや、用途変更なども想定した民間施設の借上方式を導入し、経済的かつ効率的な後利用を前提とした計画を提案します。

視点2:レガシー

～豊かな自然の中でウィンタースポーツ文化を形成～

札幌には、1972年冬季オリンピックにより整備された施設や、オリンピックを開催したことにより育まれた市民のまちに対する誇りや愛着心が、有形無形の財産として残っています。

しかし、今、1972年冬季オリンピックを知る世代の減少、ウィンタースポーツ実施率の低迷、当時整備された施設の老朽化など、歴史を継承する上での課題があります。次世代に歴史を継承していくために、これらの財産をどのように活用していくかという視点が重要であると考えます。

5. ウィンタースポーツを楽しむ文化を次世代へ

○1972年札幌オリンピック時に建設された数ある施設については、リニューアルの際にオリンピックの記憶を未来へと継承していきます。

○札幌の恵まれた雪質、身近にウィンタースポーツを楽しめる環境を活かし、子ども達のウィンタースポーツの体験機会の充実など、冬の豊かなライフスタイルを構築し日常生活の延長上にオリンピック・パラリンピックがあるという文化を創出します。

○オリンピック・パラリンピックを通じて、国籍、年齢、性別、文化の違い、障がいの有無に関わらず、すべての人がオリンピック精神である世界平和を感じ発信できる環境づくりを目指します。

○子ども達や若者をはじめ、多くの市民や来訪者に1972年札幌オリンピックの輝かしい歴史を紹介し、オリンピック・パラリンピックの価値を後世に伝えていきます。

6. 世界に誇るウィンタースポーツ都市「さっぽろ」へ

○オリンピック・パラリンピックを契機に、札幌・北海道を舞台として、アジアにおけるウィンタースポーツの国際競技力の向上のための拠点づくりを進めます。

○子どもへの教育指導者の育成、ウィンタースポーツの通年利用が可能な施設の整備や、民間企業の支援により、アスリートの育成環境を整えていきます。

○オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、大会前そして大会後も数々の国際大会を開催し、ウィンタースポーツの牽引役としての地位を高めていきます。

○道内自治体と連携し、ウィンタースポーツの魅力を国内外に発信し、ウィンタースポーツツーリズムにより、北海道を活性化させます。

視点3:まちづくり

～北の創造都市「さっぽろ」に向けて～

札幌は、1972年冬季オリンピックを契機として、さまざまな都市基盤の整備が進みました。再びオリンピックを開催することに加え、初めてのパラリンピックの開催を通じて、1972年前後に整備された都市基盤の更新や、先駆的なまちづくりモデルの提案を行うことで、すべての人にやさしい冬の豊かなライフスタイルを創出することができると考えます。

さらに、札幌市の目指すべき都市像としてのシナリオである「まちづくり戦略ビジョン」と呼応しながら、オリンピック・パラリンピックの誘致により、札幌を新たなステージへ導けるようなまちづくりが重要であると考えます。

7. オリンピック・パラリンピックを契機にまち全体をリニューアル

○オリンピック・パラリンピックを契機に、前回大会に向けて整備された競技施設や真駒内地区をはじめとする既成市街地を官民一体となって再生するなど、共創のまちづくりにより、北海道の活性化、地方創生の起爆剤としての効果を創出します。

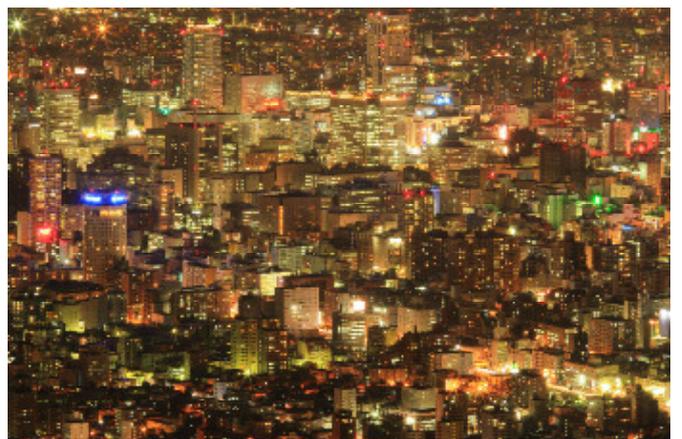
○オリンピック・パラリンピックを契機に、ホテルのグレードアップや民間ビルの建替えを支援し、再開発などの手法を活用しながら、民間投資を促し、まちのリニューアルを進めます。

○オリンピック・パラリンピックを契機に交通ネットワークの充実など、世界からアクセスしやすく誰もが快適に移動できる都市を目指します。

8. 先駆的なまちづくりのモデルを

○選手村については、選手の円滑な移動に配慮し、開閉会式会場である札幌ドームと近接させて整備します。また、札幌ドーム周辺にスポーツ科学・医学・情報研究の推進機関や市民利用も含めたスポーツ振興のための機能を整備することで、新たなスポーツ拠点を形成します。

○選手村は、地域内のエネルギーマネジメントの仕組みやユニバーサルデザインを取り入れ、後利用として人と環境にやさしい先駆的なモデルを構築します。



IV 開催にあたっての基本姿勢

～「つくる」オリンピックから「つながる」オリンピック・パラリンピックへ～

1972年冬季オリンピック大会は、インフラや施設整備を行うなど、国際都市さっぽろを「つくる」オリンピックでした。成熟都市として2度目のオリンピック、そしてパラリンピックを目指す札幌は、基本理念と8つのコンセプトを基に、「つながる」オリンピック・パラリンピックを目指します。

1972年の大会で得たものを活かしつつも、過去と未来がつながる大会とすることや、既存の都市機能と豊かな自然環境を活かして都市と自然がつながる大会とすること等、今後のオリンピック・パラリンピックの新たなモデルとして世界へ提唱していきます。

・過去—つながる—未来

1972年冬季オリンピックから繋いできたウィンタースポーツ都市としての環境・ライフスタイル・誇り・愛着を次世代の子どもたちに継承します。

・都市—つながる—自然

都市と自然の身近さを活かし、ウィンタースポーツを通じて、高度な都市機能と豊かな自然が調和したまちを創っていきます。

・オリンピック—つながる—パラリンピック

2度目のオリンピックと、初のパラリンピックの開催を契機に、まち全体をハード・ソフトの両面でバリアフリー化し、すべての人にやさしいまちを創ります。

・スポーツ—つながる—文化・観光・産業・教育

オリンピック・パラリンピックと様々な文化・観光イベント、産業、教育をつなげることで、北の創造都市「さっぽろ」を創ります。

・札幌—つながる—世界

選手を始め札幌への来訪者との交流や経済交流により、札幌が世界と結びつき、世界平和に貢献します。